

市島謙吉「早大記念録」

西 腰 周一郎

解題

本資料は市島謙吉（一八六〇・一九四四）が、東京専門学校創立二十周年記念式典・早稲田大学開校式等について詳細に記述した原稿であり、表紙には「早大記念録 篇 全」と記されている。当該の記念式典等は、一九〇二年、東京専門学校が創立二十周年を迎えるとともに、東京専門学校から早稲田大学へと改称した際に挙行された。筆者の市島謙吉は越後国出身で、小野梓の下で立憲改進黨の結成に貢献し、衆議院議員や『読売新聞』の主筆等を歴任する一方、早稲田大学の運営において、同大学理事、図書館館長等として長く活躍した人物である。

同式典に関する資料としては、『早稲田大学開校東京専門学校創立廿年記念録』（山本利喜雄編 早稲田学会 一九〇三年）がよく知られているが、本資料はこれまでその存在が知られていなかったとみられ、『早稲田大学百年史 第二卷』（早稲田大学史編集所編 早稲田大学出版部 一九八一年）でも典拠史料として使用されていない。しかし、本資料には、これまで詳細がわかっていなかった同式典の準備過程、具体的には、学校功労者の油絵寄贈の経緯、式場

のテント準備における大隈重信の指揮、提灯行列の引率者人事の理由、日本新聞社の提灯行列への冷淡な接し方等が記述されており、また、市島の目線による当時の学内事情や小野梓・天野為之らへの人物評も記されている。さらに、伊藤博文来校の感懐、東京専門学校創立時の回想なども盛り込まれており、早稲田大学の資料としても、日本近代史の資料としても、貴重な情報が含まれている。加えて、本資料の後半部分には、同式典の式次第、提灯行列の内部規定、行進音楽、関連する新聞記事などの活字資料が貼り付けられており、これも貴重な資料となっている。

本資料は、早稲田大学中央図書館の特別資料室に所蔵されており、資料の形状は、縦約二五センチメートル×横約一七センチメートルで、紐で綴じられている。なお、早稲田大学の古籍籍総合データベースにおいても、閲覧可能である（「早大記念録」として登録されている）。URLを次に記す。

(http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/104/104_01919_0762/index.html)

本稿の作成にあたっては、早稲田大学文学学術院の真辺将之准教授の御力を得た。記して感謝の意を表したい。

凡例

- ・ 取消線による抹消部分は翻刻していない。
- ・ 旧字・異体字・変体仮名等は、原則として現在通用の字体に改めた。
- ・ 後半部分に貼付されている活字資料の翻刻は割愛した。貼り付けられた新聞記事切抜の新聞名は、本資料には記載されていないが、『読売新聞』の記事が中心となっている。

本文

○紀念会雜事雜感

本年の七月例年の如く卒業式挙行之前評議員会并に社員会を大隈邸に催したときに当年は専門学校創立後滿二十二年に相当するから紀念会を開く必要がある早稲田大学は九月より開校すれども開校式はよろしく同時に遣るべしと云ふ説が出て大体それに決し○扱て紀念会并に開校式に就て何か面白い意匠があるまいかと銘々工夫したがドウも面白い思ひ付も出なかつた、先づ炬火行列、全国の校友を東京に会する事などがよからうと云ふに略々決したが、全国の校友を東京に会するときには校友の計画に属すべきであるからよろしく校友に囃り校友中より若干の委員を選出しこれに紀念会并に開校式の趣向をも工夫せしむべしと評決し扱て卒業式翌日紅葉館に開催した校友大会に於て委員を若干名挙げた、

○此の委員は両三度会合して協議を尽したが炬火行列を提灯行列と修正して第一之れを行ふ事に委員会は決し次に全国の校友を中央に会する事も決したり、扱而、祝典の趣向として委員会に議論の起つたのは演説会を府下の要所に開き学校の趣旨を披露する事、学校創立以来終始教務に当りし天野高田坪内に油絵の肖像を送り感謝之意を表する事其他功勞ある面々へ謝状を呈する事紀念絵葉書を作つて会衆に頒つことなどが重なる趣向で何分議論終に決せざる処から終に学校の重役にも委員会に出席して可否を言ふべしと校友会の請求により最後の委員会には鳩山高田坪内と余とは出席した

○油絵贈るに就ては高田より我々三人丈左様之贈物を受けては校長に対しても如何はしければと云ふごとき理由を以て辞意を表し坪内よりも頗る無益之事柄に金を投ぜんよりは何か我々の論文でも印刷して冊子を配布されてはと云ふごとき議論出で到底決定を見ざるにつき余より中裁説を出し、第一油絵肖像は天野高田坪内三氏に呈するの外歴代の

校長にも呈することに修正されたし然する以上は高田坪内の両氏も折角校友諸氏の思立なれば辞退ある可らず但し右肖像画諸氏に贈呈されたる上は銘々の私有となさず宜しく図書館に寄贈ありて閲覧室の掲用に供せられたしと衆論此議を可とし高田坪内二氏も然らば受納すべしと云ふに定まり

○府下の要所に演説会を開くべしと云ふの議に就ては学校当局者は何れも不同意にて結局廢案となりたるが、当局者の不同意とする所は自ら進むて演説会を開き自家の自慢話しをなするは甚だ穩当ならず寧ろ云はさる方奥床しくして却つて世上の同情を博せん況んや我校年所を経る僅かに二十年世間に対し大いに誇るほどの事情もあらざるに於てをやと此儀は委員も熟考之上予期のごとき結果を得ざるのみならず却つて反対の惡結果も得んも知れずと漸やく覚り之を否決して開校式の翌日并に翌々日学校の講堂に勝手に舌を役し氣燄を吐く事に決したり

○紀念絵はがき、并に紀念章を作る事、これは絵念會の節に配布之事尚紀念會の紀事をあつめ紀念冊子を作り配布之事何れも熟議を凝らしそれ／＼委員を挙げて専ら其事に当らしむる事とはなれり

○如斯して準備に取りかゝつたが一ヶ月計りは実に目を廻はすほどの繁忙を極めた、それはその筈で、新造の図書館書庫閲覧室共に紀念會迄に立派に落成して衆庶の覽に供せざるを得ないは勿論、旧書庫并に閲覧室を変して書庫を学監室閲覧室を講師室に旧図書事務室を編輯室になす模様皆工事も其時迄出来さざるを得ない、まだそののみでない、基金募集も紀念會を一断落として督促せざればなか／＼応募はか／＼しからずとてこれも一時に募集をつとむることになつたから、なか／＼の大騒ぎで余のごとき病軀も午前は図書館の整理に全力を尽し午後よりは凡そ十四五日間横濱に出張して募集に従事した様な始末であつたが幸ひに万事好都合に運むだのは学校の為めに賀すべきである

○紀念會の日は最初十月念日と定めたが一日繰上げて十九日に挙行することになつた、全体専門学校の創立は明治十五年十月念日であるから本月念日を以つて紀念日とするが当然であるけれども十九日は日曜であるから会衆の都合を

考て一日繰上る事になつたのである

○記念会開校式につき当路者が第一に苦心したのは式場である、従来は煉化講堂で大抵の事は間に合はして来たのであるが、学生二千五百と云ふ多勢となつては到底大講堂などで捌きのつくべきでない、それに基金応募者を招請すると云ふ特別の行事もあるからなか／＼講堂などで落つ付べきでない、已むなく屋外に式場を設くる事になつたが、校内では新設図書館と煉化大講堂の中間に空地を余すのみ（この処は他日中央講堂を作るべき地）であるから、これを式場に充ることになつたが、扱而当日の来客は少なく積つても三千は来る若し晴天なれば四千人以上になるも知れぬと見て、扱而これを容るゝのテントを張らざるを得ないが、なか／＼日本では斯の大規模のテントは無いので、已むなく広目屋に言ひつけて幾くつもテントをつないで不体裁なから式場は出来たが、四五千の大衆を会することの少ない我国では今更なから此般の設備の困難なるを感じた

○大隈伯はテント設備如何と最も意を用へられ前日より屢々見廻はられたが式日の前夜は特に見廻られ、幹事を呼出して自らこゝは彼様に彼処は此の様に改むべしなど熱心に指図せられ夜陰のことゝて幹事も大いに狼狽を極め漸く人夫を集めて伯の指図に応じたりと云ふ

○愈々十九日則ち専門学校と早稲田大学の歴史に特筆大書すべき日が来た、前日の大雨は夜来残りなく収まり朝来一天拭ふかごとく霄れ渡りたるは何寄の挙であつた

○扱て当日定刻式場に参列した惣数は学生か二千四百もあらん校友講師を合せて五六百来賓か五百と見るも凡そ四千人である、如斯き大衆を会するには我校に於て未曾有なるのみならず日本に於ても余り例之多からぬ事である、無慮六七千と云ふても誇張と思はれぬ程の盛況で後れ馳せに遣つて来た賓客の坐席を作るには頗る困却し校友の折角占め居る坐を奪ふて之れを与ふるの已むを得ざる仕末であつた

○今日の式場に演説を頼むた面々は教育当局者として文部大臣学者の代表者として加藤弘之実業家の代表者としては
 渋沢栄一と云ふ処であるか洋行中の不在であるから日本銀行の総裁山本達雄、政治家としては伊藤侯爵、これ等の
 面々は何れも当日の式に演説するを榮とし快よく承知した、伊藤など喜むで応じたと使に行つた長田秋濤の話してあ
 る

○少しく当日の演説を評して見んか鳩山校長の演説は例のごとく淡泊であつたか声はよく通徹した、学校の成功を隈
 伯に帰し且つ伯夫人の内助大いに学生を奨励するに功ありしと特にお世辞を夫人に呈したるは誰れも今迄忘れて言は
 ぬ事であるが校長か之れを特説せしは体を得たりと云ふてよろしい

○大隈伯の演説は常より不出来であつた、然し小野梓の功忘る可らず若し小野氏にして幸に存命せば此の祝典に際し
 定めて感喜措く能はざる者あらんと云ひしは今日の演説中欠く可らざる事実にして鳩山校長か特に天野高田坪内三博
 士を云々して小野を逸したるを補ひ得て最も好を感せしめたり

○菊池文相の祝詞代読も別に非難すべき所なし

○山本は不弁舌である、しかしおめす臆せずわかり切つたる経済話をなせし処山本の山本たる処か、演説余りに長く
 退屈を生せしも生徒は不思議に静肅謹聴の大任務を完ふせり

○加藤博士は大学の沿革（外国の）や外国の大学数と人口の比較などを調べて来て云々せり余り新らしき事実でもな
 いか学生の着眼としては面白い、加藤老人の特色は此辺に在るのだ、いつも特色を改めない処流石に感服すべきで
 ある

○伊藤候も案内の先駆として行つた長田や其後礼旁正式の案内にはる／＼大磯迄出かけた高田より学校の沿革や苦辛
 話を一と通り聞えて居つたものと見えてなか／＼剗切な演説をやつた、学校の今日あるを致したる原因を経済の遣り

方の当を得たるに帰せしごときこれ迄誰れも云はぬ事ではよく事実を道破した事である、又学校の遣り口を確かに營業的にあらざりしと賞賛せしごとき拍手を禁じ能はざる処である、伯の学校に対する冤罪を弁じたるが如き余等をして無慮の感に堪えさらしめたり、伊藤も大分今日の演説を遣るに身構ひをなし来りしと見え立派に草稿を作つて来た演説の調子も例の如く朗誦的で漢語つなぎ偏屈の演説であつた、而し速記して見るとケ様の演説は立派に読めるものである

○毎年の卒業式に朝野の名士を一人つゝ、招いて演説せしむるが二十年來の慣例で一返は大抵の名家は出席したが伊藤侯の出席はこれが初めてである、度々伊藤を招く方法を講じた事もあるが、时会宜しからずして実行の難きを感じしめしことゝ、に十数年今日終に此処に連れ来るを得しは一は時勢の一斑を見るべし又機運の一端をも知るを得べし、早稲田の土壤に伊藤の顔を印するを見ては無量の感懐を禁じ能はず、思ふに独り余のみならず学校の歴史に浅からざる関連を有するものは恐らく皆同感ならん

○演説は何れも予想よりも長かつた、それが為めに園遊会の時間も後れたが、演説の長きに多数の会衆か退屈しつゝ、もよく耐忍して演説者を満足せしめしは式の体面に於て大いに満足すべきである

○加藤老博士の演説の処に書くべきであつたが順序は違つても漏らす可らざる所感がある、それは何かと云ふに二十年前即ち専門学校創立の当時我々が帝国大学に於て校長として戴いた人は即ちけふ此の式場で早稲田大学の開校を目出度しと祝詞を述べて居る加藤君であつた、当時の加藤君は我々か小野に親しみ大隈に接し政党に關係するをヒドク嫌つた、それで当時の政治学の受持講師フキネロサをして卒業式場に於て暗に吾々の行動を非とする演説をなさしめた位である、当時我々か私立専門学校を創設するにつき加藤君は別に何も言はなかつたが小野や大隈の如き政治家と共に図つて大学に対抗するごとき学校の経画に対しても無論よく思はなかつたに違ひないかそれであるから一時は高

田や天野や坪内の如き満足に大学を卒業して連中も大学より久しい間他人扱いを受けた位であるのだ、然るに今日その老人が快よく招待に応じて早稲田大学創立の拳を嘉みしこれ迄の苦辛を多とするは時勢の推移気運の変転によるとは云へ我々には他人の知らざる感慨の胸間に出没するを禁じ能はずである

○式後大隈邸の園遊会は別に記すべき程のことも無い、唯たいつも立会の饗応は伯の賄であるが、いつもいつも伯を煩はすは心外であると云ふ趣意から今度の賄の費用は学校で弁ずる筈である、これ丈かいつもの園遊会と趣を異にして居る

○園遊会か終ると一杯元気で提灯行列に出かけると云ふプログラムである、しかし一杯元氣と云ふもの、園遊会で麦酒にありつくものは賓客や講師や校友で学生は一杯元氣と云ふわけには行かない、終日式につかれた揚句長距離の歩行は学生に取りても取りわけ職員に取りても難儀な事であるがしかし式当日多衆の会した機会にこれを遣らされれば決して成効しないは歴然であるから断然此日と決定したのである

○炬火行列は外国でよくやる示威運動で西洋の大学などには恰も今度の如き場合に遣るソウだ、兎戯に類する様だが外国では六七十の老人迄加はつて真面目に遣るソウだ、日本でも慶応義塾にやつた事がある、其ときは確かよく出来た様であつたが、早稲田大学は慶応義塾と氣風自ら異なり彼れか如く西洋崇拜でないから、成功如何と実は氣遣つた、併し早稲田中学の生徒は兎に角訓練してあり強制的にやれるから大概は成功するであろうと高をく、つてか、つたが果して大出来であつた、

○提灯行列は今度の式典の趣向の内でも最も重きを置くものである、若しこれに失体でもあるか、左なきも余り見栄えなき様の事ありては実に大事であると云ふ事から当局者は尤もこれが取締や督励に意を用ひ必らず隊長は学校の重要な職員で平素学生に信を博して居るものとした、これと同時に隊長はいかに平素無性の人でも今日は真面目に責務を

完ふせざる可らずとした、余の如きも身体に申分が無ければ自ら進むで一軍の将たるべきに、此度は閉口して自らも申出でず、人も病人と見て責任を免除して呉れた、まことになさげ無い病体である

○朝からの問題で靴に足痛を感じた余は園遊会が済むと直ちに帰宅したが此の千載一遇の行列に加はらないのは実に遺憾の極であるから切めては二丁でも三丁でも記念のために加らんと和服に改装し行列を九段坂下に迎へた、まづ九段坂を下る行列の光景をこゝに聊か記して置かう

○五時半に早稲田を發した行列であるから六時過には九段へ通りかゝると時間を見計らひ出かけて行つたが予想よりは後れて十五分余り待つたが、遙かに坂上に奏樂の音が聞こえると間もなく紅い提灯が見えはじめた、それは三人一列となつて居るのであるから遠くより見ると紅い繩を坂上より曳く様に見え奏樂に連れて蜿蜒と下つて来る有様はなか／＼の壯觀で前刻より道の両側に立迎へたる群衆は堵を築き行列の灯火が見えると何れも覚えず喝采をした、扨而行列の先鋒は漸やく坂を下つたか先鋒隊は早稲田中学の学生で高く紀念会と開校式を染抜きたる高張を擡けたるを見れば早稲田中学と大書しありたり中学生は常に号令の下に進退する慣例あれば歩調もよくと、のひ唱歌の声もさすがに面白ろく聞こえたり

○想ふに炬火行列若くはたいまつ行列は慶応義塾に帝国大学に（憲法發布の節）催されたることあり、然れども紅灯を以つて炬火に代ゆるは体裁に於てよろしきのみならず衛生にも防火にもよろしきは言ふを待たず、但し見栄えは何れかと云へば炬火行列を目撃せし友人はそれはカンテラの方なりと云へり、如何にもむき出したる灯火が油燄を放ち光天を射るさまは紅灯より見栄えあるべきかなれども、油燄のきたなきと油の衣類を汚すの不衛生はなか／＼に、特に衣服でも当坐用に作らずては堪へがたからん

○兎角机上の兵法は実地に協はぬものである、伝令使には自転車隊こそよからめと、其事に定めしが、速力の著しく

異なる車隊など斯る場合に先駆など、なるべきものにあらざ矢張り騎馬にて奏楽につれ徐づくと進むの優る万々たるは今度に於て実験されたり

○早稲田中学の一隊が万世橋の筋道を曲りて二六新報社迄を過ぎたらんと覚しきころ実業学校の一隊は来れり、これか隊長は天野博士なり、有名なる無性先生年に一度徒歩などせしことなき男なり、又斯る運動などには真先に欠席を例とする先生なり、これを通過の路傍にフト思ひ出で、其の一隊の来るを迎へ試みに天野はあるとのぞけば殊勝なり、平生の無性には似ず肅然として先導し居りたるには成る程感服と一笑した

○実業学校の一隊去つて漸くにして早稲田大学の諸隊は高等予科の一隊を先鋒として来るは余は之れに投じて行列と共に進行し神保町角に更らに政治経済の一隊即ち高田か率へし一隊を迎へ之れと共に更らに進行せり

○神保町小川町辺は九段下よりも群衆の混雑一層甚しく殊に当夜は月色も染み渡りたれば月見がてらの意着男女の賑ひさなから祭礼でもあるかの様に思はれたり又此辺は学校に縁故ある書店少からずこれ等は勿論左なくも自家の広告のため又学校と未来の関係を欲するため何れも盛んに歓迎準備をなし或は店頭で早稲田大学の開校を祝する旨を大書したる額を掲ぐるあり或は同じ文字を染抜きたる旗や提灯を掲ぐるあり、行列の通過するや店員は大挙道に擁して万歳を連呼し行列又其店の為に万歳を唱ひて相応する、喧囂は天地を撼かす計かりにて此道は時ならず大熱鬧場となり了りぬ、余は行列進行中富山房の前を過ぎ小野先生に旧縁ある此書店は如何と特に注意せしに店先に先生の肖像を安置しありたり、これには余も無慮の感慨を惹き起し、行列をわざと外れて店近く進み像を拝しなからよく視れば先生の像何となく微笑を含み居るかの如く見ゆるは余の意想なれども氏にして靈あらば此の行列を見て喝采禁する能はざるものあらん

○更らに進むて雉子町辺に行くに何人にも目立ちたるは日本新聞社の関然として斯る場合に不似合なる冷淡の態度は

人をして不満に感せしめしのみか新聞社又營業に拔目あるものとの感を抱かしめたり勿論社の構造は表屋敷にあらざれば他の同業者と聊か趣を異にし歓迎をなすに多少不便のかど無きにあらざれども操觚者としては誠に似合はしからざる怠慢と云はざるを得ず、

○「日本」と反対に満場の同情を表し大歓迎をなせしは「二六新報」社なりけり彼れは街道を挟むて大緑門を構ひ大灯笼を掲げ祝早稲田大学開校と大書し社長秋山は自ら社員朋友を率いて社樓の欄干に整列し手巾を揮つて歓迎したりこれは二六社に於て未曾有の事にて社の祝典に際してすら今迄斯る設備をなせしことなしと云ふ社前は馬車鉄道敷設しあり馬車通行の時刻内とて社前の雜踏は譬ふるものなく万歳の声は樓上と途上と相応じ耳を聳する計覚えす人をして快哉を呼ばしめたり、嗚呼斯る機会に思ひ切つたる大歓迎をなすは、新聞社それ自身に取りても頗る有益の事なり秋山定輔なかくの利巧ものなること今回の拳に依り尤もよく知られたり

○余は二六社前より列を脱し先駆隊を迎ひ且つ二重橋集合之光景を見んとて、それへ赴きしがその模様は後に書くこととして行列か新橋まで進行した其途上の光景を聞くに到る処の歓迎は予期よりも盛んにして日報社のごときは当日休業なるに拘らず殊に花瓦斯を点して盛んに歓迎し平素同感を寄せ居る新聞社に劣らざる挙措をなせしごときは特筆の価あり読売社にて麦茶と蠟燭を供給せしは誰れの指図か調法の点に於て大喝采を博したり丸善主人かシルクハットの帽を戴いて出で迎万歳を唱ひたる後行列にも書店の為万歳を請ひるときき兎角世の中は交換的なりけり殊におかしきは中将湯か大歓迎をなせしことなり女子大学ならば縁故もあらめ男子学校に中将湯の歓迎少しく方角違なりとて校友の一人は笑ひながら報せしを其儘に書きつく

○話頭転して余は二重橋の方へ迎へしが同所へ着せしは九段坂に先駆隊を迎へしより既に一時間半にも垂んとすれば間もなく先駆隊はこゝに来るならんと思ひの外三十分余待受けたり扱而兼而新聞紙上にて今夜の催しを聞知せる都下

の老弱男女は月夜に乗じて余の至る前四方より集まり会し居るもの既に数百の多きに及び其後追て来り会せるもの又数百に達したるが七時(?)五十分と云ふ時刻に先駆隊は奏樂と共に見付に入り来り天地を撼かす喝采声裡に徐々と二重橋近くより整列をはじめたるが最尾隊の着するまで凡そ三十分間を費やし、高き処に攀ちて群衆を見ればさしもに広き境内も紅灯ならさるなく壯觀云はん方なく校長の発声にて天皇陛下の万歳を三呼し一同恭しく礼をなして思ひくゝに退散をはじめたり、当初此処に於て爆竹をなす予定なりしも宮城警察にて認可を与えざりしならん其事は已みしが、無論聖上の御膝元へ斯る多衆会合し喧囂を極むる事になれば予じめ今夕の事は奏上に及び居たるに相違なく、或は伝ふ聖上は畏くも今夕の事をいとも興ある事に覚召され一同陛下の万歳を三唱せし頃は高樓に御出御あり親しく群衆を見そなはせられ龍顏殊に麗はしかりしと(此事は二六其他の新聞にも掲載しあり)嗚呼今より二十年前を顧みれば短褐汚袴を穿ちたる五六大学書生が教鞭を取り七八十人の生徒に業を授け、草深き早稲田の里と共に世人も余り注意せざりし私立学校も、二十年の星霜を経て今や天聴を煩し龍眇を辱ふるに至る曷んぞ今夕に感じて熱涙なきを得んや後にて聞けば当夜校友教輩は某酒樓に会せしが坐中田原栄あり龍眇を蒙むりし一報を耳にするや感激に堪へず声も惜ます泣き出せりと田原は学校の最も窮厄時代に尽萃せしもの感極まりて此の態を為すもと是れ当然と云ふべきのみ○五千の大衆夜中都下を横行す多少の失体や行違位は設令ありしとて別に咎むべきにあらず、而るに些の規律に触れしことなかりしは特記するに足る、又警視庁も深く同情を寄せしと覚しく都下幾千の巡査を非常召集し尤も深切なる警戒を加え吾校をして頗る満足を感せしめしも又特記を要す

○行列を行ひし翌日即二十日の午後より校友帝國ホテルに大隈伯以下学校に功勞あるもの十数名を招請し頌表を呈す余も亦与る、頌表贈進に対し大隈伯前島鳩山天野の諸氏は或は一個人として或は数人の代理として謝辞を述べられたるが余も砂川田原小川平田山田(二郎)今井、秀島の七名に代りて左の如き謝辞を述べたり

世の中追々形式に流れて賛辞眞の賛辞ならず勲章必らずしも功勲を表せずお世辞や諛辞や賞功の表示に随伴しウツカリと褒め詞を受取りかたきおぶなき世の中に於て少しも懸念なく又尤も愉快に受取得べきは諸同人より与へられたる賛辞なり諸同人は日夕相往来するもの吾れの非も吾れの瑕瑾も皆な尽知して而して後お世辞なく諛諛なく褒むべきを褒むこれ眞の褒むるなり諸同人はわる口には巧者の方なれとも人を褒るは寧ろ巧者にあらず而るに褒るを苟くもせざる諸君か吾れくゝの微功を用捨なく褒む、吾等敢て当らすと雖も其榮や実に大なり吾れくゝは王候の勲爵を拜するよりも諸同人の頌辞を榮とするものなり庶幾くは益々勤勉して犬馬の勞を取らん云々

余の辞は如此なりと雖も恐らく頌を受けたるもの、意中は誰れも余の陳ふる所の如くならん
 ○小野東洋は学校の恩人なり君の死は学校の不幸也大学設置之盛事君の靈に告げざる可らず、こゝを以て高田学監は学校総代とし山沢俊夫は校友総代として小野君の墓を谷中に展し恭しく今回之拳を告げたり、これまことに体を得たるもの而かも小野君に対し唯たこれのみにては少しく憐焉たる処あり廿一日地方校友を招請の席上此事に關し二三同人より説あり余も一説を提出せしか終に余の説の如くなすこと、なれり、そは校友より功労者の油絵を作るため醸集せる金之内若干金を以て函書を購求しこれを小野君紀念之為め図書館に備付くべし、これ小野君の氣質に適ひ恐らく君の靈も之れを可とせんと、因に云く小野君の肖像は油絵額一枚あり復た作るを要せざる也故に小野君に対する仕向は他と異にせざるを得ず余の案する所以也

※以下には活字資料が貼られている。上記の凡例に記した通り、それぞれの題目のみを記す。

- ・ 早稲田大学開校式 東京専門学校創立廿週年紀念会順序
- ・ 提灯行列順序
- ・ 提灯行列ニ関スル心得
- ・ 出発順序
- ・ 早稲田大学祝典行進歌
- ・ 早稲田大学祝典行進曲
- ・ 早稲田大学開校 東京専門学校創立二十年紀念はかき
- ・ 早稲田大学基金寄付人名 明治三十五年十月十六日調
- ・ (新聞記事切抜) 早稲田大学開校式
- ・ (新聞記事切抜) 大隈伯の演説
- ・ (新聞記事切抜) 伊藤侯爵の演説
- ・ (新聞記事切抜) 加藤文学博士の演説
- ・ (新聞記事切抜) 山本日本銀行総裁の演説
- ・ (新聞記事切抜) 菊池文部大臣の祝詞大要
- ・ (新聞記事切抜) 開校式と牛込区の光景
- ・ (新聞記事切抜) 提灯行列と我社
- ・ (新聞記事切抜) 大隈伯演説大要 (早稲田大学開校式)
- ・ (新聞記事切抜) 伊藤侯演説の大要 (早稲田大学開校式)

・稟告校友諸君

明治三十五年十月念日起筆
春城山人